

早乙女清房博士を悼む



弔 辞

^{そのとめ}早乙女清房先生はわが国天文学の先達として、その開拓と進展に大きな貢献をされました。

また日本天文学会の創立に参画され、永く評議員あるいは名誉会員として本会の発展に尽力されました。

先生の御逝去にあたり、ここに謹んで哀悼の意を表します。

昭和 39 年 8 月 5 日

日本天文学会理事長

一 柳 寿 一

早乙女先生を偲ぶ

宮 地 政 司*

冬の寒い日であった。早乙女先生を最後にお訪ねしたときのことを思い出す。まだとても健康そのものでおられたときである。蔵書の一部を天文台にお譲りねがったお礼のため参上したのであった。ご長男のお住いのある屋敷内の別棟に、ご夫妻で静かなお暮しのご様子であった。こたつにいられていただいて、例のゆっくりした口調でいろいろなお話を伺ったのだった。米寿とは思われぬお元気であった。そしていまはそのお姿に接する術もないのである。

大学の一年のとき最小二乗法の講義を聴いたのが先生との交渉の始めであった。間もなく先生は留学された。いまのように飛行機でいける時代には想像もできないことだが、当時は欧州へ 30 日も 40 日もかかったのである。それだけに留学することは大変な事件だった。その留学がきまり留学費が大学から出たとき、先生のご母堂がその金をそっくり大学へ寄附されたという噂をきいた。できないことだとも思ったし、先生はたいへんな金持だとも思った。そして天文学なんかやる以上は名利を度外視すべきであると覚悟はしていたが、金持でなくてはやれないものかと淋しい思いがしたことを思い起こす。

早乙女先生は昭和 3 年以来、平山信先生の後をついで東京天文台の台長を兼ねられた。そのころ天文台は三鷹の地に移転を終り諸設備も一通り完成していた。塔遠望鏡や 65 センチ大赤道儀も完成したばかりだった。以来 8 年間の天文台は早乙女先生の人柄のようなおらかな

平和な時代であった。華々しい研究の成果が期待されていた若い優秀な天文仲間が、続々病没した惜しい時代でもあった。研究奨励の意味で日本文による研究を集めた天文台報や本学会の天文要報が出版されたのも先生のお考えによったものであった。

早乙女先生は台長として週 1 回本郷から三鷹へ来られた。それ以外のときは自転車を踏んで武蔵境駅から 4km の道を往復された。そして夕方おそくまで研究室におられた。始終時計室で英国製のシンクロノーム振り子時計と取り組んでおられるのをよくみた。先生は太陽観測や日食観測など多方面の観測研究にたずさわられたが、時計の研究はとくにお好きで、自宅には趣味として蒐集された和時計などが沢山飾ってあった。ご長男を時雄と名付けられたほどである。

早乙女先生の集会でのスピーチは一流のものであった。空とぼけたようにとつとつと話されたが、ユーモアたっぷり寸鉄肝をえぐるものがあつた。それでいて、平素は一般に無口で、何かお伺いしても「ハー」といわれてから暫く考えて答えられるという慎重な方であつた。大器といった風格がある。

先生は煙草を全然手にされなかったが、酒の方はたしなまれたようである。だが酔うほど飲まれたのをみたことはない。いつのことだったか、天文台で談話会のあつたときだったかと思うのであるが、故平山清次先生と酒と煙草の優劣良否について論争が展開された。平山先生は瘦型長身で、煙草はお好きのようだったが酒は一切口にされなかった。肥満型の早乙女先生とは何にかにつ

* 元東京天文台長